

「パラダイム」とその周辺(5)

JDA 理事 安藤温敏

4 パースペクティブについて

今回は、パラダイムと似た概念である「パースペクティブ」というものをご紹介します。パースペクティブという概念は、しばしばパラダイムと混同され、アメリカのディベートの教科書でも同列に扱っているものがあるほどです。ここでは、パースペクティブの考え方を説明し、どのような使われ方をしているか、見ていきます。

皆さんは、複数のジャッジが同じ試合を見て、異なった結論が出ることに對して、疑問を持ったことはないでしょうか。パラダイムが一緒であれば、何人でジャッジしようとも、同じような結果になるのではないかと考える方もいるかもしれません。

もちろん、ジャッジの能力の差もあるでしょう。スピーチの内容が聞き取れたり聞き取れなかったり、という差によって勝敗も影響を受けることがあるかもしれません。しかし、同じように聞き取れていても、その議論をどのように解釈するかが異なる場合があります。そのとき、ジャッジによる反応の差を理解するのに、パースペクティブという考え方が役に立ちます。

4-1 パースペクティブの簡単な定義と種類

この連載の第一回で、パラダイムとは「ディベートの試合を判定する方法の基礎となる考え方である」と書きました。パースペクティブも、判定方法の基礎になる考え方の一つです。ただし、パラダイムが、現実世界をモデルにして、判定の具体的方法を決定するのに対して、パースペクティブは、もっと漠然とした、審判のディベートに対する心構えや態度、といった意味で使われることが多いです。

4-2 議論批評パースペクティブとタブラ・ラサパースペクティブ

上の説明だけではよくわからないと思うので、さっそくパースペクティブの例を説明していきます。

パースペクティブにも、パラダイムと同様、い

くつかの種類があります。その代表的なものが、議論批評 (Critic of argument) パースペクティブとタブラ・ラサ (Tabula rasa) パースペクティブです。

4-2-1 議論批評パースペクティブ

議論批評パースペクティブをとる審判は、まず論題に対する一定の世界観を持った状態で、ディベーターの議論を聞きます。そして、それら議論に対して、批評・分析を加えます。そうして自らの立場に修正を加え、その結果によって勝敗を決定します。

審判は、ディベーターの議論をそのまま鵜呑みにはせず、自らの知識と照らし合わせて、極力合理的な解釈を試みます。従って、審判の最初の認識とかけ離れた議論や、分析が十分でない判断された議論は、このパースペクティブをとる審判からは排除される傾向が強くなります。

4-2-2 タブラ・ラサパースペクティブ

先ほどの議論批評アプローチに対して、タブラ・ラサ (ラテン語で「何も書いていない石板」の意味です) パースペクティブをとる審判は、まずはディベーターの言うことを、批判を排除して、できる限り全て採用しようとしています。

審判の知識とは異なる議論や、多少分析が浅くても、相手が落とした議論などは、このパースペクティブをとる審判の下では採用されることが多くなります。

4-2-3 実際の運用

議論批評と、タブラ・ラサの間にははっきりした境界線がある訳ではなく、程度問題です。議論批評を極端に推し進めると、ディベーターのほとんどの議論は「証明不足」ということで排除され、議論と全く関係無いところで試合の勝敗が決定することとなり、ディベーターにとってはおもしろくないでしょう。

一方、タブラ・ラサの立場を推し進めると、デ

ディベーターの議論は何でも取ってもらえますが、どんなに分析が甘くて、理由がわからないような議論（たとえば、18歳選挙権を認めると、世界平和が訪れる——理由はわかりませんが——などといった議論）でも、反論が無い限りは採用されてしまいます。これはこれで、質の低い議論が大量に出てくることになり、やっぱり具合が良くありません。

現実的には、完全なタブラ・ラサ、という立場はおそらく不可能です。ディベートの議論を理解するためには、様々な前提条件に関する知識が不可欠でしょう（たとえば、選挙権・被選挙権についての議論を、日本の選挙制度に関する知識が皆無な状態で判断する、という状況を想像してみてください）。実際には、極端な議論批評の立場と、極端なタブラ・ラサの立場の間のどこかで審判を行うこととなります。

4-3 どちらが優れているのか

議論批評と、タブラ・ラサは、どちらが優れているのでしょうか。これは、一長一短なところがあり、明確な結論が出ている訳ではありません。

タブラ・ラサの立場は、ディベーターの独創的な議論を促進し、ディベーターの考える力を伸ばすことができるという利点がある一方、質の低い議論を大量に出して、相手が反論できなかった議論だけを伸ばす、という作戦を助長してしまう、という欠点があります。

議論批評の立場は、質の低い議論を排除して、試合で出てくる議論の質を高める効果がある一方、おきまりの議論が繰り返されて、ディベートが退屈になってしまったり、ディベーターが自分で議論を作ろうという意欲を削いでしまうかもしれません。

私の経験では、ディベートを引退して間もない若い審判の方々は、タブラ・ラサに近い立場を取る方が多いように思います。一方ディベート教育に長く携わっている方は、議論批評アプローチに近い立場の方が多くいます。ディベーターとしては、自分たちの議論を、あまり批判せずにとってほしい、という気持ちの表れでしょうか。

ただし、どちらの立場も、審判の最初の考えに反する議論でも道理にかなっていさえすれば採用される、という点では同じです。そうでなければ、

ディベーターの議論によらず、最初から結論は決まっていることになり、ディベートをする意味が無いからです。

4-4 ディベーター・審判のすべきこと

上記の説明をふまえて、ディベーターや審判が、この知識をどのように利用するかを考えてみましょう。

4-4-1 ディベーターの場合

ディベーターとして、議論を作成するときは、審判が少し厳しい議論批評の立場を取っていることを前提にすると良いでしょう。厳しい分析に耐えられる議論を作ることができれば、タブラ・ラサの審判に対しても有効なはずですが、審判がどちらのタイプなのか、事前に判断することは困難です。何試合もすれば、様々なタイプの審判に遭遇するはずですから、ある程度の批評に耐える議論を作っておいて、状況に応じて多少の省略を行ったり、分析を付け加えたりすることで対応するのが良いと思います。

4-4-2 審判の場合

審判をする際には、自分が議論批評的な立場なのか、タブラ・ラサ的な立場なのか、きちんと理解しておくべきです。どちらの立場を取るかは、好みで決めて良いと思います。ディベーターのレベルや、試合の内容によって、ある程度は立場を変えても良いでしょう（例えば初心者が多い大会では、議論採用の基準を多少低くする、など）。

ただし、一つの試合の中で出た複数の議論に異なる基準を当てはめる事は避けるべきです。ある議論に対しては厳しく分析しておきながら、ある議論は分析が浅くても取ってしまう、といった事が許されるならば、審判は自分の好きなように勝敗を決定することができてしまい、ディベーターの不信を招くでしょう。例外的に厳しく／甘く見る議論がある場合（たとえば、論題充当性の議論だけは、厳密に判断する、など）は、事前にディベーターに知らせるべきでしょう。

以上のことは、審判をする際には無意識にやっていることだと思えますが、パースペクティブ、という概念を理解することによって、審判の方法を見直すきっかけになると思います。